
スマブラのF(ファンタジー)

鳴海歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマブラのF（ファンタジー）

【Nコード】

NO140L

【作者名】

鳴海歩

【あらすじ】

ある少年、イリス・ジェットにより、スマブラキャラ達が、色々なことに巻き込まれてしまう。

プロローグ（前書き）

初であり連載です。

温かく見守って下さい。では、スマブラのF、ファンタジー始まりですが、短い
です。

プロローグ

ここには、スマブラキャラが住んでいる屋敷である。そして、なぜか玄関の扉に、「強い入居者募集中」とあった。

そして、その家の前に、金髪で前髪の右側が上がっており、黄色の瞳、そして、昔の旅人が持つような袋を持っている。この少年の名はイリズ・ジエツト。運命は、この少年により、小さくだが、動き始めることになる…

一方、スマブラキャラ達は、大家に、必死にお願いをしていた。それは、また次回にします…

続く…

プロローグ（後書き）

いかがですか。

いいて言ってくれたら調子によって書きますが…
それではまた。

第1話 テスト（前書き）

第1話です。

戦闘シーンが超下手ですが、温かく見守って下さい。
次回に関しては、後書きで。

第1話 テスト

タブーが「とにかく払ってくださいよ。4ヶ月も滞納しているんですよ。」と少し怒りながら言う。

すると全員を代表しマリオが、「いくらなんでも3百万はないだろ！」と堂々と言った。

「じゃあどうするつもりですか！」タブーも少しじれったくなったのか、怒鳴り始めた。

「だから今、入居者募集していつしよに払うつもりです！」リンクが言った。

それを聞いたタブーは、「じゃあ早く払ってくださいよ。」と行って去って行った。

「こつちだつて苦労してんだよ！」
ペロを出しながらマリオが言った。

「ハア…何でこんなことに…」とルイーダが愚痴をこぼすと、その時。

「おーい！誰かー！」

「まさか！」

「入居者？」

期待に胸を膨らませ、マリオは玄関にでた。

「ああどうも。」

マリオ達は大歓迎した。「じゃあ自己紹介をしてもらおうか。」マリオがいうと、「イリス・ジエットです。」

「へえ。じゃあテストをするから。」

「え？」

イリスは目を丸くした。「張り紙に書いてあつたら？『強い入居者募集中』で。だって強い奴じゃないと面目たたないもん。」

「ああ…」

「じゃあ中庭にきて。」中庭は本当に戦闘用に作られていて、何も

なかった。

「じゃあ僕が相手です。」

「リンクか…よし。」

イリスは持っていた袋から大剣をとりだした。

「!？」

そのあまりの大きさに皆驚愕してしまった。

「いくぜ！」

「!!!」（纏う雰囲気が変わった!ただ者じゃあないぞ。）

「やああああああああ!!!」

イリスからしかけた。

「くっ！」

すんでのところまで避けたリンクは、回転切りをした。

「やああああああ!!!」

「おっと。」

「なに?!」

「遅えんだよ！」

イリスは、大剣を正面に構え、「ラージンドラゴン！」と叫ぶと辺

りがフラッシュし、気が付くとリンクの後ろにイリスがいた。

それが分かるようになると、リンクは倒れた。

サムスらは一瞬訳がわからなかったが、すぐ

「イリスの勝ち！」

と言った。

「おお。いいじゃねえか。歓迎するよ。」

マリオが言った。

「ああ。ありがとう。」「じゃあバイトいくか。」

「は？」

イリスが目を円くする。

「お前も来るよな。家賃払うためのバイト。」

その時、イリスはわかった。

ああ、ここ金無いんだ…と。

第1話 テスト（後書き）

どうでしたか。

次回からは、めんどくさいんで、セリフの前に名前を入れます。
では、また次回。

第二話 ディーア（前書き）

はい、今回にまた新キャラクターがでます。
許して下さい（汗）

第二話 デイアー

さて、イリスが住むようになってはや1ヶ月。

全員相変わらずのバイト生活で、イリスは主に力仕事をしていた。

ある日、イリスは、温泉の薪割りをしていた。

イリス「ふう、薪割りも意外と大変だ。ちょっと休むか。」

そして壁に座り込み、何気なく空を見上げた。

イリス「そう言えば、もう1ヶ月経つな。」

とつぶやくと、向こうに人影が見えた。

イリス「あ、おばちゃん。もう終わ…！」

???「よう。久しぶりだな。イリス。」

イリス「デイアー!!!」

そのデイアーと呼ばれる男は、黒いジャケット、革の指だし手袋、赤いGパンを履いていた。

イリス「お前、今夏だぞ。」

デイアー「ああ、だから暑い。」

イリス「バカだろお前…」

デイアー「ファッションだ。ファッション。」

イリス「ちゃんと季節に合うやつ選べよ…」

デイアー「わかった。気を付けよう。」

そしてイリスは口調を変えて、

イリス「で、何の用だ。」

するとデイアーはニヤリと笑ってから、こう言った。

デイアー「今日はやめだ。又改めて話をしよう。」

イリス「もう御免だね。」

するとデイアーは、どこかえと行った。

イリスはしばらく考え、イリス「おばちゃん。もう終わったよ。」

改ページ

そして昼、イリスは散歩に出かけた。

するとまたデイーアに会った。

イリス「またか。」

とため息をつくとき、デイーアが言った。

デイーア「立ち話もなんだし、お前の家に連れて行け。」

イリス「断る。」

イリスは即答した。皆に迷惑をかけたくなかったのだ。

デイーア「なんならこの近くにいる奴殺してやるつか。」

デイーアが挑発するように言った。

イリス「ちっ…わかった。」

ちなみにイリス達の家については後書きで。

サムス「お帰り、イリス。あれ？誰その人。」

イリスは少し唇を噛んで、

イリス「旧友さ。」

と言った。

イリス（間違っちゃいないが、認めたくない。）

デイーア「お邪魔します。」

デイーアが愛想よく言う。

イリスが部屋に案内して、鍵を閉めた。

イリス「何の用だ。」

イリスが椅子に座りながら言った。

デイーア「イリス、帰ってこいよ。俺達の町に。」

するとイリスが怒鳴った。

イリス「ふざけるな！！お前のような奴の巣窟に戻るか！！！！！！

第一、俺は住んでいたんじゃないぞ！！」

するとデイーアが、何か企んでいる様子で言った。

デイーア「『やつ』がいるのか？」

イリス「な、なんだと…『やつ』が…？」

一体『やつ』とは誰なのか…謎は深まっていく…

続く

第二話 デイア（後書き）

さて、イリスの家について書きます。

イリス達の家は、二階建てで、一階はリビング、キッチン、等、二階は、それぞれの部屋があります。

ところで最後に出てきた『やつ』。

まあだんだんわかってくる形式にしますから、そこん所お願いします。

では、また次回。

第三話 イリスの身の上話（前書き）

やっとイリスの身の上を書けました。

ちょっと暗いですが、よろしく願っています

第三話 イリスの身の上話

イリス「どういう事だ！『やつ』がいるなんて！」

イリスはテールをどんと叩いた。

デイーア「あいつは、いきなり帰って来た。そしてお前がいた所を荒らして、俺達に言った。『イリスを連れて来い。』と…あいつは何か企んでいる。嫌な予感がする。だが逆らったやつは…」

イリス「…『死の制裁』か。」

とイリスが憎らしげに言った。

デイーア「ああ。」

イリス「つまり、俺が行けばいいんだな。」

デイーア「ああ。そういうことだ。ものわかりがいいな。」

イリスは大剣を入れた袋を持って言った。

イリス「じゃあこのこともお別れだな。」

と言うとイリスは下に降りていった。

マリオ「あ、イリス。友達が来たらしいな。」

イリス「ああ。で、故郷に帰ることになったんだ。」

マリオ「は？」

イリス「ごめん。…じゃあ明日出るから。」

マリオ「ちょ、ちょっと待てよ。せめて場所は？」

イリス「…：言えない。」

その時、マリオの目付きが変わった。

マリオ「イリス。俺達はヒーローだぞ。悪いことは勘で分かる。ましてやお前くらいの強さなら、何かあったのかはすぐ分かる。」

イリス「…：駄目だ。言えない。」

イリスはうつむきながら言った。

イリス「これは俺の問題だ。」

マリオ「イリス、俺達は仲間だ。だから、何があってもお前を受け入れる。だから言え。」

イリス「…わかった。言おう。だがその前に、あいつを帰らせていか？」

マリオ「ああ。」

イリスはディアを帰らせて、自分の身の上を話し始めた。

イリス「俺はある村に居たことがあるんだ。その時は両親もいた。

けど、『ディザイヤー』ていうやつが来てな。そいつは有名な殺し屋だった。そいつは、俺の両親を殺した。」

全員「！！！」

イリス「あいつは、ある奴の依頼で俺ら家族を殺すよう命令されたらしく、目的はわからないが、両親は殺され、俺はかるうじて生き延びたが重症だった。

両親が死んだ事で居場所を無くし、俺は逃げるように村をでて、ある山で修行をした。そこでこの大剣『バグナー』を手に入れた。

だが、まだ力が足りなかった。そこで俺は、スマブラという強者の集まりがあると知った。

それでここにきたんだ。」

リンク「なるほど。」

全員納得した。

マリオ「じゃあ行くか。」

イリス「は？」

マリオ「だって仲間だろ。家賃だって払わなきゃなんねえし。」

イリス「あ、いや、でも…」

マリオ「じゃあ決定！！みんな、明日の準備しとけよ。」

イリスが呆然としてみると、ルイージが肩に手を置いて、言った。

ルイージ「ま、兄さんなりの優しささ。」

イリス「ああ、ありがとう。」

イリスは少し泣きそうになったが、ぐっところらえて、

イリス「歩きだからな！覚悟はいいな！！」

全員「オー！！」

…さて、一体どんな村なのか。

続
く

第三話 イリスの身の上話（後書き）

次回から、やっと村に行けます。
まあ代わりないですが。

第三話 デイズィ（前書き）

やっとデイズィヤーでて来ます。
では、始まり始まり。

第三話 デイズイ

次の日、イリス達は村へとむかった。

リュカ「ねえまだ？ずいぶん歩いたよ。休もうよ。」

イリス「もう少しだからな、がんばれ。」

リュカ「さつきもそう言ったじゃん。」

ネス「わがまま言うなりリュカ。」

リュカ「だって山越えたり川渡ったり吊り橋渡ったりしたもん。今は森の中だし。」

サムス「そう言われてみたらめっちゃめっちゃへんぴね。」

マリオ「たしかに。」

全員がイリスを見る。

イリス「おお見えて来た。」

すると森を抜け、崖の下に村があった。

その村はやはりかなりへんぴで、木で出来た家、少し離れた所にある水車小屋があり、一番、目についたのは、村の中心にある西洋風の洋館だった。

サムス「本当にへんぴな村ね。」

マリオ「じゃあ宿探すか。」

マリオが飛び上がりながら言った。

イリス「いや、今夜は野宿だ。」

マリオ「はあ？」

サムス「馬鹿ね。イリスは狙われているのよ。宿に泊まったら殺されるわよ。」

マリオ「あ、…わかった。」

イリス達は薪を集め、野宿の準備をした。
そして夜。

マリオ「ネス達はもう寝たか。」

サムス「ええ、でも、こうやって見ると可愛らしいのにな。」

イリスとマリオとサムスが話をしていた。

イリス「村の近くだったら、火でばれていたから俺達もおねんねしてたかもな。」

三人「ハハハハハハハハ…」三人は不安感を押さえるため、無理に笑った。

イリス「…むなしすぎる…」

二人「同感。」

一気に気まずい雰囲気になった。

イリス「俺達も寝るか。」

マリオ「ああ。」

…そして次の日。

イリス「よっしゃいくか！」

マリオ「しかしどこに居るんだ？」

イリス「あの西洋風の洋館だ。あいつは前もあそこに居たからな。」

イリス達は洋館に向かった。

洋館についたイリスは、ドアを蹴り破った。そして、屋敷に響くように叫んだ。

イリス「デイザイヤー！俺だ！イリスだ！決着をつけに来た！今からそこに行く！首を洗って待つてろ！」

???「待て。」

イリス「!!!誰だ!!!」

ディーア「まず俺が相手だ。」

そこには、完全に武装したディーアが居た。

イリス「え？何でなんだ？」

ディーア「オラア！」

イリス「な？くっ！」

いきなり襲って来たディーアの攻撃をかわしたイリスが、剣を構える。

イリス「ディアブレイヴァー！」

イリスは通りぬきながら、剣で複数回切った。

ズバァ！ズバババババァ！

デイーア「ぐああああ！！！」

イリス「え？」

イリスは二つの意味で驚いた。

一つは、勿論呆気なくやられたこと。

二つ目は、デイーアがやられる前、笑ったように見えたからだ。

イリス「おい！デイーア！」

デイーア「イリス……」

デイーアが床にどさりと落ちた。

デイーア「イリス……俺達は、お前の両親を追い出した……それは、あ

いつに逆らったら『死の制裁』をすると脅されたんだ……」

イリス「！！！！」

マリオ「『死の制裁』？」

サムス「殺してあるのは間違いないわね。」

死にそうなデイーアが言った。

デイーア「……勝てよ。イリス。」

イリス「デイーア……」

マリオ「イリス……『死の制裁』てなんだ。」

イリス「簡単に言えば処刑さ。ときには崖から突き落とす。時には

毒で殺す。勿論ディザイヤーがやる。」

サムス「！！！！」

イリス「だが、まだ序の口だ。酷いときは体のあちこちをギリギリ

死なない程度な切り刻み、最後に治療をしないまま溺死させるんだ。

傷の痛みと息の苦しさを、最悪の拷問であり処刑だ。」

全員「！！！！！！」

リュカが思わず、近くにいたリンクの服の裾をつかむ。

イリス「……行くぞ。」イリスは最上階に向かって走り出した。

マリオ「何でディザイヤーが居るところが解るんだ？」

イリス「あいつはそういうやつだ。」

最上階についたイリス達は、一番奥の扉をあけた。

そこにはフードを被った男が居た。

イリス「デイザイヤー、いや、デイズイ。」

全員「え？」

全員目を丸くした。

マリオ「お、おいイリス！どういう事だ！デイズイって！」

イリス「今思い出した。あいつの本名はデイズイ。デイザイヤーは偽名だ。」

デイズイはフードを脱いだ。

赤い髪、胸元にドクロマークがあるコート。

殺し屋らしい服装だった。

デイズイ「まさかお前から訪ねて来てくれるとはな。復襲か？」

イリス「いや…」

デイズイ「クククククク…」

デイズイはニヤリと笑ってから言った。

デイズイ「しかし、殺すと言ってもただ殺すのは面白くない。」

イリス「！！まさか、やめる！！」

デイズイ「自分を責めさせながら殺す！オラアアアア！」

イリス「みんなにげる！！」

全員「！！」

デイズイ「ハッハー！！」

そうさげんだ瞬間、辺りが爆発した。

全員「ぐああああああ！！！！」

イリス「みんな…！お前ええ！」

デイズイ「ハハハハハハハハ！！」

イリス「くそおお！！！！」

デイズイ「来い！！！！」ノ殺器『炎刀』！！！！

デイズイはコートの中から、剣を出したが、だした瞬間炎を帯びた。

イリス&デイズイ「やあああああ！！」

デイズイ「復襲か！！ならば俺を楽しませろ！！」

デイズイは興奮しながら言った。

イリス「違う！！俺はケジメをつけに来たんだ！！！」

イリスは剣をあて、両方は弾き飛ばされた。

イリス「あの時、自分さえも守れなかったこの俺に！！！」

デイズィ「面白い。それでは見せてもらおうかそのケジメとやらを。

┌

イリスとデイズィが対峙する。

続く

第三話 デイズィ（後書き）

ディーア死んだ…（ー…）話の都合上殺しました。

第四話（前書き）

やっと終わります。

思えばみじかったな…はあ…

第四話

イリス「やあああああ!!」

デイズイ「二ノ殺器『火炎車』!!」

デイズイの腕、ふくらはぎ、両足に二つ、尖った歯車が出た。そして、炎を帯び、回り始めた。

デイズイ「ダアッ!!」

デイズイはパンチを繰り出した。

イリス「…な!!ぐはっ!!」

(な、なんではやくなってるんだ。)

イリス「くっ!!」

イリスがかろうじて耐える。

デイズイ「フツ。…らあ!!」

デイズイは歯車で移動をした。

イリス(速い…!!)

デイズイ「はっ!!」

イリス「!!ぐああああ!!」

デイズイは歯車でイリスを切り刻んだ。

イリス「ぐっ!!…なるほど…あの歯車が攻撃手段と移動手段になっているのか…」

その時デイズイが、フツ、と笑った。そして、

デイズイ「…そろそろ、終わらせるか。…終ノ殺器『金鋼鎧』!!」

と言って、火炎車を引っ込めた。

そして、だんだんと体が鋼色に変わってきた。

デイズイ「これが最終兵器だ!オラア!!」

と言うと超スピードで駆けてきて、イリスの腹を殴った。

イリス「!!!!ぐあっ!!…かっ…あっ…」(あばらが、折れた…)

デイズイ「ハハハハハハハ!!ハッハッハ!!」

デイズイが狂ったように笑った。

イリス「何笑ってんだよ…」

イリスが剣で体を支えながら起き上がった。

イリス「行くぞ！お…！！」

ズキィ！

イリス「があっ！！！！」(あばらが…クソッ！こんなときに…)

イリスの攻撃の威力が削がれたまま、デイズイに攻撃を当てる。

キーン！

デイズイ「おっ？」

半ばデイズイが驚く。

デイズイ「まさか弾かれるだけとはな…」

イリス「何？」

イリスが痛みを耐えながらいう。

デイズイ「てつきり折れると思ってたんだがな…」

イリス「…この剣がそう簡単に折られてたまるか。」

デイズイ「ほう…その剣…『バグナー』、だな。」

イリス「知っているのか…」

デイズイ「殺し屋だからな。武器はしつとかなければ。」

イリス「そうか…」

デイズイ「しかし、よく抜けたな。『ドラゴンール』の『Zソー

○』みたいなもんだろ。」

イリス「修行したんだよ。」

デイズイ「なるほど…まあ、俺には勝てんがな！」

デイズイは、また殴りかかって来た。

イリス「まさかこれを使う事になるとはな…」

イリスを大きく息を吸って、

イリス「最終奥義、『グレイブ・ソード』。」

デイズイ「！！！！」

イリスの剣に気が纏い、半径20メートルの衝撃波がでた。

デイズイ「！！！！な…」(これは…殺られる！)

イリス「無に帰れ！デイズイ！」

デイズイはぴたりと立ち止まった。

デイズイ「なんだと…俺が…この俺様が…こんなガキに…！！こんなガキに！」

イリス「やああああ！！！」

デイズイ「ぐああああああああああ！！！」

ドーン！

館が半分ぶっ飛んだ。

デイズイは死んでいた。しかし、形は残っていた。

そして、

マリオ「あ、ぐぐ…みんな、無事か…？」

かろうじて耐えたマリオが言った。

イリス「え？…マリオ？」

リンク「あ、ああ…なんとか…」

リュカ「う、うん…」

イリス「…み、みんな…」

イリスが少し涙ぐむ。

マリオ「へ、へへ…」

マリオがグッドポーズを見せた。

イリス「よかった…」

イリスは床に座り込んだ。

そして、我慢できなくなつたのか、ぼろぼろと涙を流し始めた。

また、死んだと思つてた…また、守れなかつたと、思つてた…

でも、俺は、今度は、大切な物を、失わなかつたんだ

マリオ「…イリス？」

あの時、大切な物を守れなかつたけど、今は、まだ、一緒に笑える仲間がいる。だから俺は今、泣かずに、一緒に笑つていよう。

全てが終わつたとき、大泣きするために

イリスは立って、マリオたちのそばにいった。

イリス「おいおい。大丈夫か？」

マリオ「大丈夫…な訳ねえだろ！」
イリス「え？」

マリオは少し嬉しそうに、
マリオ「じゃ、帰ったらバイトな。」

イリス「ええええ！」

マリオ「え？当然だろ。まさかお前、ここまでしておいて、のうのうと住む訳じゃねえだろうな？」

イリス「うへーい。」

けど、イリスは内心嬉しかった。

こんな自分から、関わりたくない、離れるかも知れないと思ってしまうからだ。

イリス「ほんと…バカだよな。俺…」

イリスはボソリと呟いた。

イリス「終わりなんて、あるわけないのに…」

その後、ディーアの葬式が行われ、マリオたちは村人たちに看病され、一命をとりとめた。

そして、出発の日。

村の宿屋で、マリオたちはイリスがいないのに気付いた。

マリオ「イリスは？」

宿屋の主人「多分ディーアの墓じゃないでしょうか。」

マリオ「そうか…」

リンク「そつとしておきましょう。」

マリオ「ああ…」

マリオたちは朝食を食べながら言った。

そのころ、ディーアの墓では、イリスがお参りをしていた。

イリス「ディーア…」

その時、墓穴のなかにキラリと光るものを見つけた。

イリス「これは…」

イリスは、それを拾った。

それは、両手でもてる大きさの、虹色の鉱石だった。

イリス「これ、なんでこんなところに…もしも腹の中にあつたら、焼かれたし、それでなくとも、納骨の時に気付くはずだ。…誰かが入れたのか？そうとしか考えれないが…」

イリスはそれを不思議そうに眺め、持っていく事にした。

イリス「ディーアの形見だ。持っていくか。」

だが、これはとんでもないものなのだが、それは後で解ることとなる。

そして…

マリオ「じゃあなー！！ありがとよ！！」

サムス「じゃ、今度はちゃんと暮らさないよ。」

村人「ええ！」

イリス「それじゃあな。」

村人A「え？ここに残らないんですか？」

村人B「なんなら家を建てても…」

イリス「ごめん。嬉しいんだけど…」

イリスは恥ずかしそうに言った。

イリス「俺には、俺の帰りを待つてくれる奴等がいるから…」

村人C「そうですか…残念です。」

イリス「でも、いつかきつと、ここに来る。約束だ。ディーアにもいつといてくれ。」

村人A「…わかりました。それじゃあお元気で！」

イリス「ああ！」

イリスたちは、また改めて、あの日常とかえって行く…

続く

第四話（後書き）

次回からは、バイト生活に戻ります。

そして、ギャグです。

それじゃあお元気で！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0140/>

スマブラのF(ファンタジー)

2010年10月12日01時46分発行